広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XX 2008. 3. 22

小学校における郷土音楽の学習に関する研究

－オペラ「白壁の街」に着目して－

山 村 朋 子
（本講座大学院博士課程前期在学）

はじめに

国際化が進む今日、日本人として自国の文化を見つめることが重要であるとして、日本の伝統文化を学習することの必要性が唱えられている。平成10年度改訂の中学校学習指導要領では、器楽指導において、「和楽器については3学年間を通じて1種類以上の楽器を用いること」という項が加えられ、小学校学習指導要領においても、「各学年にわたる内容の取扱いと指導上の留意点」として、「我が国や諸外国に伝わる楽器などのなかから児童の実態に応じて選択すること」、「長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げるようにすること」という項が加えられた。

しかし実際には、1人の教員が多くの伝統音楽の技法に熟達し、指導することは困難であろう。伝統音楽や郷土の音楽の指導を有意義なものとするためには、音楽科担当教員だけが取り組むのではなく、学校全体での取り組みや、ゲストティーチャーの活用など地域との連携が必要であると考える。

そこで「総合的な学習の時間」を利用して学校全体で郷土の文化の学習に取り組んでいるX小学校のオペラ「白壁の街」に着目し、観察および質問紙調査を実施した。本研究は、この質問紙調査を考察することによって、郷土の文化や音楽の学習が児童に与える影響を明らかにすることを目的とする。

Ⅰ．オペラ「白壁の街」について

1．オペラ「白壁の街」の目的

オペラ「白壁の街」は、酒都として栄え、長い歴史を持つ郷土の伝統的産業である酒造りを題材に、X小学校で教材化し、創作された。「酒造りのために、半年間にわたって郷里を離れて働く蔵人たちの苦労や工夫、新酒のできあがる喜び」を歌、合奏、地域に伝わる盆踊りなどの多様な表現活動で構成したものである。

また、創作された当時のX小学校の教育理念「自ら学ぶ子どもを育てよう」「一人一人を生かした教育活動を創造しよう」に基づいて誕生したものの1つで、酒造りの仕事に打ち込む蔵人たちの姿をオペラで追体験することにより、良い酒を造るための工夫や努力、喜びを知り、郷土文化の伝承と郷土の発展を願う気持ちが子どもたちのなかに育成されることを目ざすものである。

2．オペラ「白壁の街」のあゆみ

昭和56（1981）年に当時の教育理念のもと、教員が創作し、音楽科担当教員が郷土に伝わる民謡をもとに作詞・作曲・編曲を担当して作られた作品で、その後、受け継がれていくなかで現在の形に作り上げられていった。その年に初めて上演されてから現在まで、27年間受け継がれている。初演当初は、クラブ活動としての取り組みであった。人数不足のために、たいていの児童は1人2役、多い場合は3役をこなした。また、当時の校長より相談を受けた酒造組合もこの取り組みに賛同し、小道具の提供やはっぴの貸与などに協力したという。

このように、オペラ「白壁の街」は地域で協力して創り上げてきたものといえる。児童や教職員の伝統を引き継ごうという意欲や情熱と、保護者・酒造組合・地域の方々の協力のもとに、今日まで受け継がれている。

3．オペラ「白壁の街」の構成

オペラ「白壁の街」は、日本酒ができるまでの過程を音楽や踊りを用いて表現する音楽劇である。日本酒造りの作業過程の一例は以下のようになっている。

＜日本酒造りの作業過程の一例＞

手順	内容
1. 精米	米の表面のぬかを削る。
2. 洗米	機械化もあるが、竹籠やさらしを用いて十分に洗いすすぐ。
3. 浸漬（しんせき）	洗った米を水に浸し、秒単位の計時で吸水させるデリケートな作業。
4. 蒸し米	甑（こしき）で蒸して米のでんぷんをアルファ化させる。
5. 麹造り	蒸し米の一部に種麹菌をふりまき、温度・湿度に気をつけて麹菌を増やす。
6. 酒母造り	麹・蒸し米・水に酵母を加えて発酵を促す「もと」をつくる。
7. 仕込み	蒸し米・麹・酒母・水をあわせた物「もろみ」をタンクの中で発酵させる。糖化と発酵が同時に進む。
8. 上槽（じょうそう）	もろみを酒粕と液体に分けるために、酒袋や槽（ふね）に重ねて搾り出す作業。新酒の誕生。
9. 澱（おり）引き	できた新酒の澱を沈ませ、残存物を除くために濾過する。殺菌をしていないので保存しにくいが、香りが高い生酒。
10. 火入れ	生酒の変質を防ぐために、加熱殺菌する。その後の瓶詰めの時にも加熱される。
11. 貯蔵熟成	火入れ後の生酒をタンクの中で1～3月ほど熟成させる。温度管理が最も重要。水を加えてアルコールの度数を調整して瓶詰めを待つ。
12. 瓶詰め	瓶詰め直前に火入れをし、無菌にされた瓶に詰められラベルを貼って出荷。

オペラ「白壁の街」では、これらの行程をもとに、次のような過程を表現している。

①蔵入りの場　④仕込みの場
②蒸米（むしまい）造りの場　⑤盆踊り歌
③麹室（こうじむろ）の場　⑥樽踊り

また、劇中で歌われる歌は全部で8曲で、以下に劇中歌と児童が担当する役割を示す。

＜歌＞

1. 蒸し米の歌
2. 仕事歌
3. 祈りの歌
4. もとの仕込み
5. 盆踊り準備の歌
6. 喜びの歌
7. 地域の盆踊り歌
8. 地域の樽踊り

＜役割・パート＞

役割	内訳	人数
合奏隊	指揮者、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、アコーディオン、木琴類、打楽器、樽太鼓、締太鼓、和太鼓、シンセサイザー、エレクトーン	77人
歌	杜氏（とうじ）、蔵人（くらびと）（「仕事歌」など）、盆踊り歌	24人
身体表現	蔵人	18人
スライド・ナレーター		4人
合計		119人

（2006年7月現在）

Ⅱ．児童を対象とした質問紙調査

1．調査の方法と目的

ここでは、2006年度のX小学校6年生の児童全員を対象として実施した質問紙調査について考察する。調査の目的は、その地域に伝わる郷土の文化や音楽、地域性の高い創作音楽に取り組むことが児童にどのような影響を与えるのか、学習の教育的効果を明らかにすることである。調査は、練習中の7月（pre-test）とすべての発表が終了した12月（post-test）の、計2回実施した。次頁に、質問項目を示す。

・質問Ⅰ　音楽の授業について（5段階評定　18項目）
・質問Ⅱ　オペラ「白壁の街」について（5段階評定　17項目）
・質問Ⅲ　オペラ「白壁の街」の取り組み時の雰囲気について（5段階評定　14項目）
・質問Ⅳ　オペラ「白壁の街」における担当・役割について（選択・記述　1項目）
　　オペラ「白壁の街」の取り組みに対する気づきや感想、そして日本伝統音楽や郷土の音楽に対する気づきや感想について（自由記述　6項目）

2．調査の結果

(1) 全体的な特徴

全体的に、高い数値を示しており、児童のこの活動に対する関心の高さがうかがえた。主な特徴としては2点あげられる。

第1は、5段階評定のpre-testとpost-testの結果を比べたとき、多くの項目でpost-testの数値がpre-testの数値を上回っている点である。発表後の数値の上昇が児童のどのような変化を示しているのかを、分析によって明らかにしたいと考える。第2は、自由記述の回答内容にも、活動に対する児童の関心や意欲の向上が見られた点である。post-testでは、pre-testよりも具体的な内容が書かれており、記述数も増加している。これらの記述内容の変化にどのような傾向があるのか、全体と役割別の結果を比較、検討する。以下、質問項目ごとに結果を考察していく。

(2) 音楽の授業について（5段階評定　18項目）

質問Ⅰは、音楽の授業に対して児童がどのように考え、感じているかを問うもので、表1は、質問項目ごとに全体の回答の平均値を示したものである。

表1　質問Ⅰの各項目の平均値　[pre-test（7月）とpost-test（12月）とその差]

5＝肯定的、1＝否定的	Pre (7月)	Post (12月)	差		Pre (7月)	Post (12月)	差
Ⅰ-(1)　音楽の授業に積極的に参加しているか否か	3.86	3.87	0.10	Ⅰ-(2)-9 自分の考えをもてるから	3.60	3.53	-0.07
Ⅰ-(2)-1 音楽が好き・嫌い	3.85	3.98	0.13	Ⅰ-(2)-10 活動しやすい雰囲気だから	3.68	3.73	0.05
Ⅰ-(2)-2 授業が楽しい・つまらない	3.87	3.98	0.11	Ⅰ-(2)-11 長所を発見でき伸ばせる	3.43	3.58	0.15
Ⅰ-(2)-3 授業が好き・嫌い	3.66	3.93	0.27	Ⅰ-(2)-12 歌がうまくなりたいから	3.71	3.70	-0.01
Ⅰ-(2)-4 勉強になるから	3.78	3.90	0.12	Ⅰ-(2)-13　礼儀や規律を身につけるのに役立つから	3.24	3.45	0.21
Ⅰ-(2)-5　「白壁の街」と関連があるから	3.84	3.99	0.15	Ⅰ-(2)-14　根気強さを身につけるのに役立つから	3.46	3.53	0.07
Ⅰ-(2)-6 声の出し方がわかるから	3.81	3.98	0.17	Ⅰ-(2)-15　授業で扱う曲に興味があるから	3.79	3.74	-0.05
Ⅰ-(2)-7 みんなが活動しているから	3.43	3.56	0.13	Ⅰ-(2)-16　責任感を身につけるのに役立つから	3.44	3.65	0.21
Ⅰ-(2)-8 気分がすっきり・重い	3.83	3.88	0.05	Ⅰ-(2)-17 感動できるから	3.48	3.79	0.31

※▒は最大値、□は最小値、＿＿は差の最大値を表す。

音楽の授業に関して、最も数値が大きかったのは、pre-testではⅠ-(2)-2「楽しいからかつまらないからか」、post-testではⅠ-(2)-5「オペラ「白壁の街」と関連があるからか否か」という項目で、逆に最も数値が小さかったのは、pre-test、post-testともに、Ⅰ-(2)-13「礼儀や規律を身につけるのに役立つか否か」という項目であった。

以上のことから、児童は音楽の授業は楽しいが、礼儀や規律、根気強さなどを身につけるためにはあま

り役に立つものではないと感じているようである。今回は音楽の授業を観察していないため、明確にその要因を挙げることはできないが、可能性の1つとして、オペラ「白壁の街」の練習では礼儀や規律、精神面に関する指導も厳しく行われているために、音楽の授業は純粋に音楽を楽しむ時間であると感じているということが推測される。

(3) オペラ「白壁の街」について（5段階評定　17項目）

質問Ⅱは、オペラ「白壁の街」に対する児童の考えを問うものである。

表2　質問Ⅱの各項目の平均値　[pre-test（7月）とpost-test（12月）とその差]

5＝肯定的、1＝否定的	Pre (7月)	Post (12月)	差		Pre (7月)	Post (12月)	差
Ⅱ-(1)　「白壁の街」に積極的に参加しているか否か	4.39	4.45	0.06	Ⅱ-(2)-9 長所を発見でき伸ばせる	3.79	3.74	-0.05
Ⅱ-(2)-1 「白壁の街」好き・嫌い	4.18	4.21	0.03	Ⅱ-(2)-10　礼儀や規律を身につけるのに役立つから	3.53	3.78	0.35
Ⅱ-(2)-2　「白壁の街」が楽しい・つまらない	3.91	3.91	0.00	Ⅱ-(2)-11 活動しやすい雰囲気だから	3.66	3.86	0.20
Ⅱ-(2)-3 やりがいがあるから	4.30	4.37	0.07	Ⅱ-(2)-12 グループ活動が好き・嫌い	3.90	3.89	-0.01
Ⅱ-(2)-4　授業で学んだことを生かせるから	3.83	3.92	0.09	Ⅱ-(2)-13 勉強になるから	4.00	3.87	-0.13
Ⅱ-(2)-5 自分の考えをもてるからか	3.74	3.78	0.04	Ⅱ-(2)-14　根気強さを身につけるのに役立つから	3.94	4.03	0.09
Ⅱ-(2)-6　取り組む曲に興味があるから	3.90	4.06	0.16	Ⅱ-(2)-15　責任感を身につけるのに役立つから	3.74	4.13	0.39
Ⅱ-(2)-7 みんなが取り組んでいるから	3.51	3.74	0.23	Ⅱ-(2)-16 感動できるから	4.09	4.50	0.41
Ⅱ-(2)-8 気分がすっきり・重い	3.90	3.90	0.00				

※▒は最大値、□は最小値、〰は差の最大値を表す。

全体的に、4点前後という高い数値を示している。最も数値が高かったのは、pre-testではⅡ-(1)「オペラ「白壁の街」に積極的に参加しているか否か」、post-testではⅡ-(2)-16「感動できるからか否か」という項目である。この結果から、練習中のpre-testの時期には積極的に練習に参加する児童の様子があり、発表を終えたpost-testの時期では、最後までやり遂げた感動や達成感を味わっている児童の様子が見られる。

また、最も数値が低かったのがpre-test、post-testともにⅡ-(2)-7「みんなが取り組んでいるからか否か」であったという結果は、「周りのみんなではなく、自分がどう動くかが大切」という指導者の言葉がけによる影響が表れているのではないかと考えられる。

(4) オペラ「白壁の街」の取り組み時の雰囲気について（5段階評定　14項目）

質問Ⅲは、オペラ「白壁の街」に取り組んでいるときの雰囲気や印象についてたずねた項目である。

表3　質問Ⅲの各項目の平均値　[pre-test（7月）とpost-test（12月）とその差]

	Pre (7月)	Post (12月)	差		Pre (7月)	Post (12月)	差
Ⅲ-1 いごこち良い・悪い	3.30	3.66	0.36	Ⅲ-8 うきうき・沈んだ	3.33	3.42	0.09
Ⅲ-2 のびのび・きゅうくつ	3.20	3.41	0.21	Ⅲ-9 やる気がある・なし	4.05	4.51	0.46
Ⅲ-3 楽しい・つまらない	3.67	3.83	0.16	Ⅲ-10 真面目・不真面目	4.03	4.33	0.30
Ⅲ-4 親切な・不親切な	3.29	3.49	0.20	Ⅲ-11 まとまり ある・なし	3.94	4.37	0.43

Ⅲ-5 のんびり・せかせか	2.46	2.44	-0.02	Ⅲ-12 きびきび・だらけた	3.96	4.36	0.40
Ⅲ-6 ひまな・忙しい	2.10	1.95	-0.15	Ⅲ-13 暖かい・冷たい	3.63	3.64	0.01
Ⅲ-7 なごやか・とげとげ	2.73	2.83	0.10	Ⅲ-14 明るい・暗い	3.78	3.92	0.14

※▒は最大値、□は最小値、　は差の最大値を表す。

この質問では、「いごこちが良い」「やる気のある」「真面目な」「まとまりのある」「きびきびした」など肯定的な回答が多く、pre-testとpost-testを比較してもプラスの効果が多くみられた。また、Ⅲ-10「真面目か不真面目か」、Ⅲ-11「まとまりがあるか否か」、Ⅲ-12「きびきびしているか否か」を問う項目でも同様に大きくプラスの結果を示している。この結果から、練習開始時から発表終了時にかけて、徐々に活動の雰囲気が引き締まっていった様子がうかがえる。観察中も、児童の間に私語はなく、全員が高い集中力を維持していることが伝わってきた。また、pre-test、post-testともに最大値を示した、Ⅲ-9「やる気があるか否か」という項目は、post-testでは「4.51」となっており、最高値の5点に近い結果となっている。

(5) 担当や役割について（選択・記述　1項目）、および、オペラ「白壁の街」の取り組みに対する気づきや感想、そして日本伝統音楽や郷土の音楽に対する気づきや感想について（自由記述　6項目）

ここでは、オペラ「白壁の街」の取り組みに対する気づきや感想、そして日本伝統音楽や郷土の音楽に対する気づきや感想についての児童の記述をまとめた。

児童の役割は、主に「歌」「合奏」「身体表現」の3つに分かれており、人数はそれぞれ表4のようになっている。「歌」は1人で歌う部分をもつ児童である。「合奏」は、楽器を演奏する役割を担う児童であるが、1人で1つの楽器を独奏する児童も、複数で同じ楽器を担当する児童も、同様に「合奏」のグループに含めた。そして、「身体表現」は、酒造りの様子を演じ、表現する役割を担う児童である。

ここでは全体の傾向を調べるとともに、児童をこの3つのグループに分け、それぞれのグループの回答に特徴がみられるかどうかを、比較、分析した。以降の図は、棒グラフが質問項目ごとに全員の記述内容を分類したもので、折れ線グラフが回答を児童の役割ごとに分類し、比較したものである。

表4　役割別の人数

	歌	合奏	身体表現	無記入	計
2006年7月	23	73	16	7	119
2006年12月	22	78	20	1	121

①オペラ「白壁の街」に取り組んでいて、嬉しかったこと、楽しかったことについて

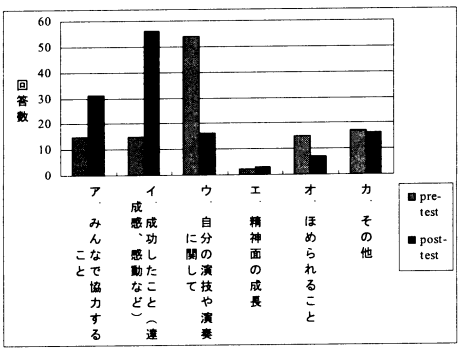

図1　嬉しかったこと・楽しかったこと

「嬉しかったこと、楽しかったこと」という肯定的な面で、pre-testとpost-testでは結果が大きく異なった。練習中のpre-testでは、「ウ．自分の演技や演奏に関して」の回答が最も多かったのに対し、舞台発表後に行ったpost-testでは、「イ．成功したこと（達成感、感動など）」に関する記述が最も多い。発表後に多くの児童が達成感や感動を味わっているという結果から、児童がこの活動に非常に真剣に取り組んでいたことがうかがえる。

「カ．その他」には、「伝統的なオペラ「白壁の街」ができる」「酒造りについてわかる」「○○役になれた」などの回答を含めた。特にpost-testには、「きれいな音楽をつくること」「地域のたる踊りや盆踊り歌」など、演奏すること自体を楽しんでいるような記述が見られた。また、「特になし」や無回答のものも含めている。

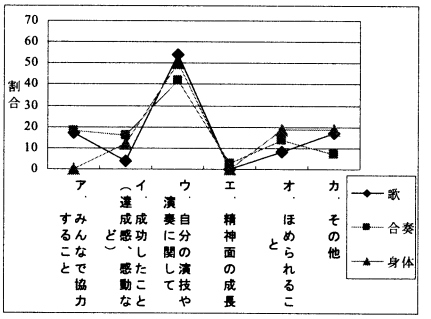

図2　嬉しいこと・楽しいこと（pre-test）

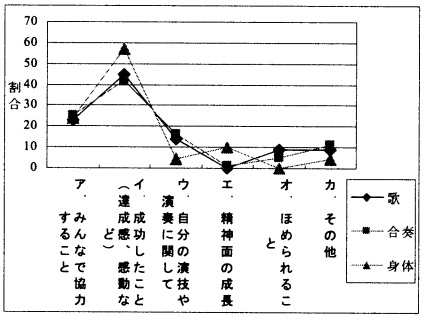

図3　嬉しかったこと・楽しかったこと（post-test）

役割別に見てみると、大きな傾向は全体と変わらず、特に「歌」と「合奏」グループは、post-testでは非常に似た結果となっている。しかし「身体表現」のグループは、pre-testでは「ウ．自分の演技や演奏に関して」の回答が多数を占め、「ア．みんなで協力すること」の回答率0％であったが、post-testでは、「ウ」の回答率は下がり、逆に「ア」の回答率が「歌」や「合奏」グループと同様の25％程度に上がっている。また、「イ．成功したこと（達成感、感動など）」のpost-testでの回答率は3グループのなかで最も高い数値を示し、「エ．精神面の成長」の回答率もpre-testでは3グループ中最も低かったにもかかわらず、post-testでは唯一増加している。以上のことから、日々の練習や発表を経て、個人の演技だけに気を配るのではなくみんなで協力して表現することに喜びを感じるとともに、成功したことへの達成感や精神面での成長を感じることができたと推測される。

②オペラ「白壁の街」に取り組んでいて、いやだったこと、大変だったことについて

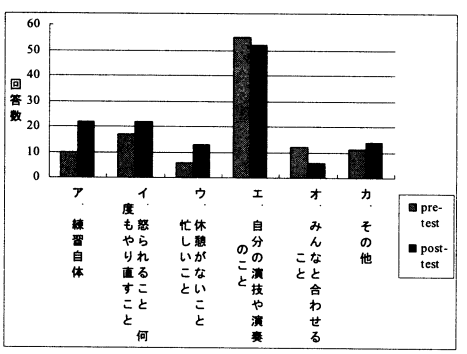

図4　いやだったこと・大変だったこと

pre-testとpost-testでは大きな変化はなく、「エ．自分の演技や演奏のこと」に関する回答が最も多くなっていた。また、難しかった点や改善すべき点を挙げるなど、児童は一貫して、自分の演技や演奏について厳しい評価をしていた。

次に多かったのは、「真剣にやっているのに認められないこと」や「同じところを何度もくり返すこと」など、練習の厳しさについてであった。

役割別の回答でも、全体の回答と同様の傾向がみられた。

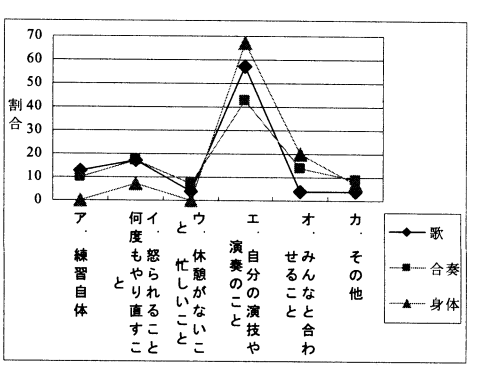

図5　いやなこと・大変なこと（pre-test）

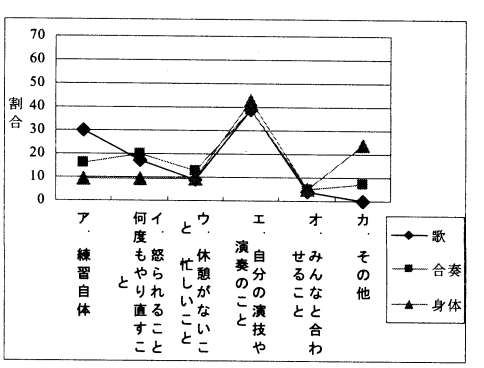

図6　いやだったこと・大変だったこと（post-test）

pre-testは自分の演技や演奏に関する記述が特に多いが、post-testでは他の分類項目との差が減り、グラフの山が少しなだらかになっている。この要因としては、pre-testの時期（７月）は練習の最中であるため、まず自分の演技や演奏に関することに関心が集まったが、post-testの時期（12月）は発表も終わり、オペラ「白壁の街」から離れて少し冷静に練習時を振り返ることができたために、演技や演奏以外の部分で大変だったことを記述した児童が増えたのではないかと推測される。

③オペラ「白壁の街」に取り組んでいて、ためになったことについて

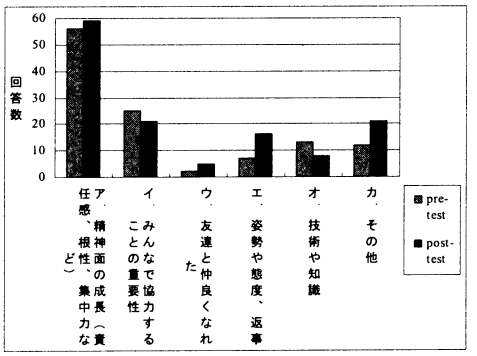

図７　ためになったこと

pre-test、post-testともに、「ア．精神面の成長（責任感、根性、集中力など）」が身に付いた、という記述が特に多かった。さらに、「我慢すること」や「責任をもって自分の役割を果たすこと」、「緊張感をもって臨むこと」など、具体的な記述が多く、これらの内容は練習中の指導者の言葉がけに含まれていたものであることから、指導者の言動が児童に与える影響の大きさがうかがえる結果となった。

役割別では、３グループとも「ア」の記述が最も多く、全体の回答と同様の結果となった。また、post-testでは「エ．姿勢や態度、返事」に関する記述が少し増加している。観察していく過程で筆者が感じた礼儀や規律などの精神面の成長を、児童自身も感じているようである。

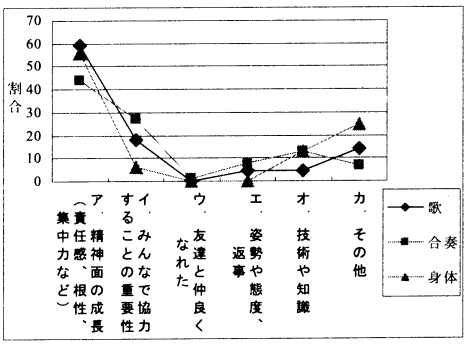

図８　ためになったこと（pre-test）

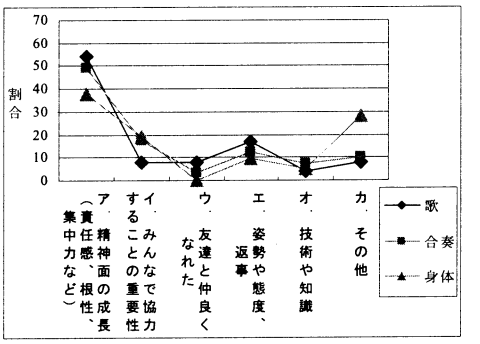

図９　ためになったこと（post-test）

④オペラ「白壁の街」に取り組んでいて、わかったことについて

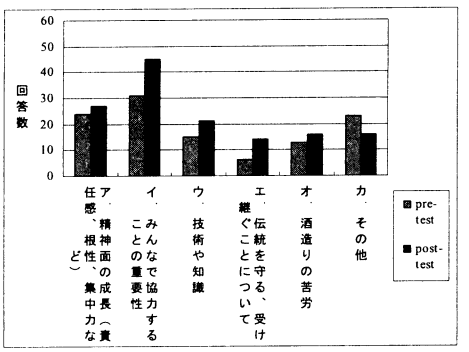

図10　わかったこと

pre-test、post-testともに、「イ．みんなで協力することの重要性」についての回答が最も多く、post-testでは特にその傾向が強くなっている。

また、「カ．その他」に含めた回答には、pre-testでは「時間の大切さ」「もっと真剣に取り組まなければならない」「自分たちが未熟であるということ」といった記述があり、指導者の言葉をしっかり受け止めようと努力している児童の姿がうかがえる。逆に、post-testでは、「大勢で１つのものを作り上げるのは大変だということ」「基本が大事」「結構つらかった」など、児童の言葉で綴られた回答が多くなっていた。

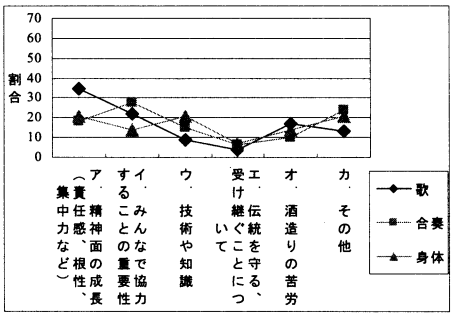

図11　わかったこと（pre-test）

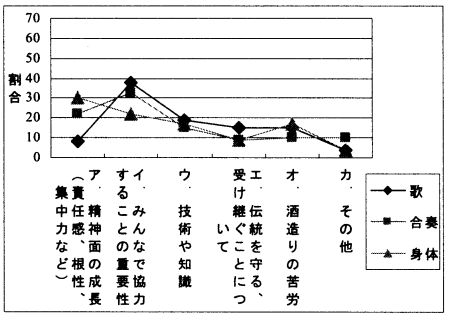

図12　わかったこと（post-test）

役割別に見ると、3グループの回答にはばらつきがみられる。「合奏」グループのグラフは、pre-test、post-testともに全体と同様の形を示しているが、「歌」と「身体表現」のグループは違う傾向を示している。

「歌」グループは、pre-testでは「ア．精神面の成長」に関する回答が最も多いが、post-testでは「ア」は減少し、逆に「イ．みんなで協力することの重要性」に関する記述が増加している。「身体表現」グループは、pre-testでは、「ア」「イ」「ウ．技術や知識」に関する回答が同程度に並んでおり、post-testでは、「歌」グループとは逆に、「ア」に関する記述が増加し、「ウ」が減少している。

以上のことから、「歌」グループは、練習の過程では精神面の成長を感じ、発表を終えたときには、周囲と協力して1つのものを作り上げていくことの難しさや喜びを感じとっているといえる。そして「身体表現」グループは、練習時には技術や知識の獲得を顕著に感じていたが、発表後には精神的に成長できたことを最も感じるようになったといえるであろう。

⑤オペラ「白壁の街」に取り組んでいて、できるようになったことについて

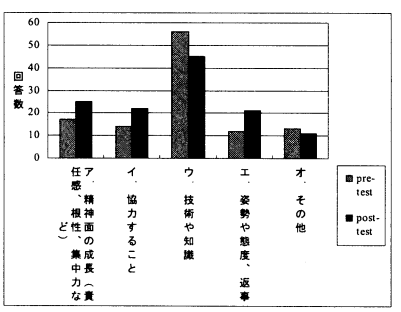

図13　できるようになったこと

ここでも、pre-testとpost-testは同様の傾向を示している。どちらも「ウ．技術や知識」に関する記述が多く、オペラ「白壁の街」を通して、「楽器の演奏技術が上がったこと」や「酒造りに関する知識が得られたこと」などが挙げられている。

さらに、post-testでは、「ウ」に関する記述がやや減少し、その他の「ア．精神面での成長」「イ．協力すること」「エ．技術や知識」に関する記述が増加している。このことから、発表がすべて終了し、取り組みを振り返ったとき、児童が技術や知識だけではなく、精神面や協調性の面でも成長することができたと感じている様子がうかがえる。

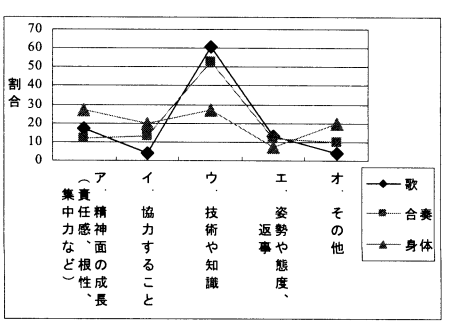

図14　できるようになったこと（pre-test）

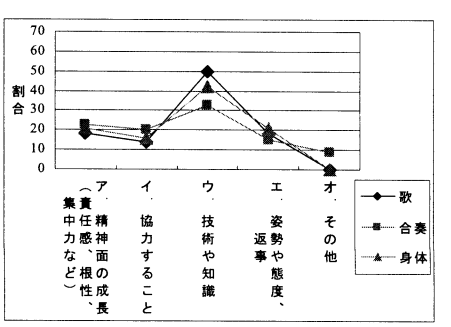

図15　できるようになったこと（post-test）

役割別に比較すると、「歌」「合奏」グループは全体と同様の傾向がみられた。逆に「身体表現」グループは、pre-testよりpost-testで「ウ」の記述が増加している。これは3グループ中、特に「身体表現」グルー

プが、技術や知識に関して「できるようになった」「成長できた」と感じていたことを示している。

⑥伝統音楽や郷土音楽について、気づきや意見

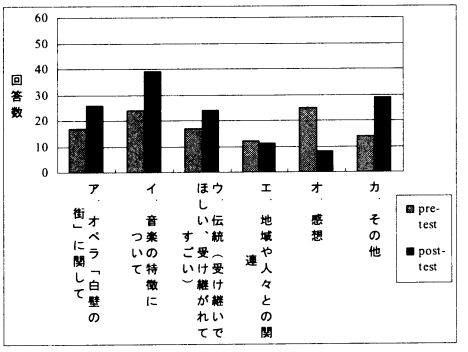

図16　伝統音楽や郷土の音楽について気づきや意見

この質問の回答に関しては、pre-testとpost-testに異なる傾向がみられた。pre-testでは、意見というよりは「オ．感想」といえる記述が多かったのに対し、post-testではそのような記述は減少し、「低い音が多く使われている」「ゆったりとしている」「暗めの音楽」など、児童が感じ取った音楽の特徴を述べる「イ．音楽の特徴について」の記述が多くなっていた。これは、オペラ「白壁の街」を経験したことによって、伝統音楽や郷土の音楽について、より深く考えて記述するようになったということの表れではないかと考えられる。

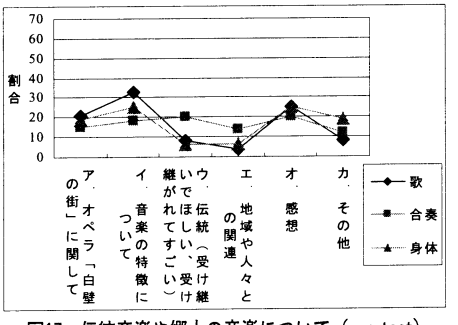

図17　伝統音楽や郷土の音楽について（pre-test）

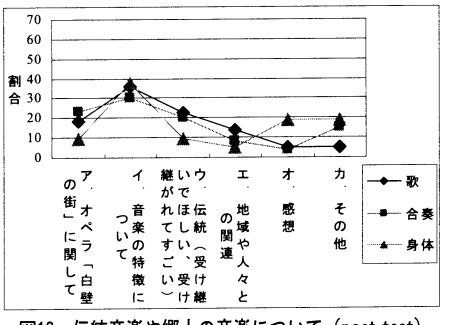

図18　伝統音楽や郷土の音楽について（post-test）

役割別の傾向では、「歌」グループと「身体表現」グループは、pre-test、post-testのどちらも「イ．音楽の特徴について」の記述が多かった。

また3グループとも、pre-testでは「オ．感想」に当てはまる記述が多いが、post-testでは「歌」と「合奏」グループの「オ」の回答率は減少している。「身体表現」グループは、「オ」の回答率に大きな変化はないが、「ア．オペラ「白壁の街」に関して」の記述が減少し、「イ」の回答率が増加している。どのグループも、オペラ「白壁の街」を経験したことによって、伝統音楽や郷土の音楽に対して、経験する前とは違う印象をもつようになったといえるであろう。

しかし、この質問は児童にとって難問であったようである。記述内容を見てみると、伝統音楽や郷土の音楽ではなく、オペラ「白壁の街」のことを指しているのではないかと推測される内容が多々あった。

この問いは、伝統音楽に触れていなければ答えることが困難な質問であったため、音楽科の授業や総合的な学習の時間などで伝統音楽を学習したかどうか、予備調査をすべきであった。

そして、児童の記述を見ると、彼らのなかには「伝統音楽＝白壁の街」という認識ができており、伝統音楽や郷土音楽を狭い世界で捉えているように思える。この認識を広げるためには、自分たちの地域以外の伝統音楽に触れる機会をもっと増やすべきである。学校独自の取り組みをさらに生かすためにも、音楽科の授業で伝統音楽や各地の郷土音楽、世界の民族音楽についての学習を交えて教えるなど、視野を広げるような工夫をするとよいのではないであろうか。

Ⅲ．考察とまとめ

「歌」「合奏」「身体表現」の3グループに分けて考察した結果、各グループの特徴が明らかになった。各項目のpre-testとpost-testの結果を比較すると、3グループ中で大きな変化が現れていたのは、「身体表現」グループであった。pre-testでは他のグループに比べ記述が少なかったが、post-testでは記述が増え、内容

も積極的なものが多くなっていた。逆に、大きな変化が少なかったのは「歌」グループと「合奏」グループである。しかし「歌」グループは「合奏」グループと比較すると、多少変化が大きくなっている。

このような変化の差が生まれる要因として考えられるのは、人数の違いによる役割認識の差である。3グループ中、最も人数が多いのは「合奏」グループで、少ないのは「身体表現」グループであった。多人数のグループに属する児童は、自分の役割を大勢のなかの1人として認識するが、少人数のグループに属する児童は、練習を進めていく過程で個としての自分の役割を認識し、他の児童に頼ることなく、意欲的に活動に取り組むようになる。属するグループの人数の差によって役割に対する認識の違いが生まれ、その差が活動に対する意欲の差や意識の違いに現れるのではないかと推測される。

しかし、オペラができ上がっていく過程で、児童は集団でオペラを作り上げる喜びや楽しさを感じながら、自分の役割について考えていた。卒業時には、卒業論文の作成をするなかで活動を振り返りながら、オペラのなかでの自分の役割を再認識し、1つのものを作りあげる上での役割の違いを認識していたことが、卒業論文の記述から見えてきた。さらに、大勢のなかの1人ではなく、1人ひとりが意味をもった重要な役であったと自覚する児童が増えていたこともうかがえる。

また、調査の回答や記述内容から、郷土の文化や音楽を知ること、伝えることの大切さや、現代まで伝承されてきたことの素晴らしさを児童は実感していることがわかった。そして、回答には「これからもずっと伝えていきたい」「続いていってほしい」という児童の願いも記されていた。

児童の記述やX小学校の教員の話などから、オペラ「白壁の街」の取り組みでは、「郷土を知ること」「郷土の文化や音楽を尊重する態度を養うこと」「文化や音楽を伝承すること」が達成されたと考えられる。これらは創作オペレッタやミュージカルなどの取り組みでは得られない効果であり、郷土の音楽を取り扱う意義であるといえるのではないであろうか。

児童は、オペラ「白壁の街」に取り組む前段階として、5年生で酒蔵見学や「白壁新聞」の製作などを行い、酒造りの過程を学習している。地域の伝統産業である日本酒造りの過程を学習することは、郷土の文化の一端に触れることである。文化は、地域の歴史や人々の生活、他の地域との関連などが密接に関わっており、郷土の文化を知ることは、その地域の人々、さらには自分自身の背景を知ることにつながる。児童の自由記述の回答にも、「オペラ「白壁の街」の学習をとおして郷土を身近に感じるようになった」という内容の記述が多く見られた。郷土の文化を学習することは、児童が郷土を知り、その地域の一員としてのアイデンティティを確立するために有効であると考えられる。

おわりに

今回は、「総合的な学習の時間」を利用して取り組まれている、オペラ「白壁の街」について全体の傾向や児童の役割別の傾向などによって、学習の効果を検討した。オペラ「白壁の街」は、27年の歴史をもつ作品である。児童は取り組みのなかで、郷土について知るとともに、この作品が代々受け継がれてきたことの意味や継承することの難しさ、大切さを感じ取っていた。また、地域の盆踊り歌など、郷土に伝わる音楽に触れることによって、地域を身近に感じるようになっていった。学習をとおして、地域に対する愛着がわき、郷土の文化や音楽を尊重する態度が養われていったと感じる。

また、今回調査した児童の追跡調査として、X小学校と同じく「総合的な学習の時間」を利用して郷土の文化や音楽を題材とした音楽作品の上演に取り組んでいる、同じ地域の中学校の生徒に質問紙調査を実施した。今後は、この質問紙調査の結果を分析することで研究を進めていきたいと考えている。

＜参考文献＞

・峯岸創監修『日本の伝統文化を生かした音楽の指導』暁教育図書、2002
・文部省『小学校学習指導要領解説－音楽編－』教育芸術社、1999
・文部省『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－音楽編－』教育芸術社、1998
・大元理恵子「日本音楽学習指導の具体化への視点－3つの実践例に見られる理念と実際－」『音楽教育学』22-1号、1992、pp.3-12